413 食道静脈瘤における食道胃シンチグラムの有用性 —Open tip 法との比較—

中西敏夫，佐々木正博，春間　賢，大道和宏，
徳冨　正，藤井康史，勝田静知（広大放部）
川上広育，井上正規（広大第1内科）

食道静脈瘤に対し離断術および内視鏡的硬化療法を施行した症例につき食道機能検査としてのＲＩ動態検査の有用性を open tip 法を用いた infused Catheter 法と比較検討した。

方法：$^{99m}TcO_4^-$ 0.5mCiを含む水15ml を嚥下させ、さらに30秒後同様に嚥下させ、食道とくに下部食道のＲＩ通過時間およびＲＩ残存量を検討した。また胃から食道への生理的逆流をみるため、昼食後１～２時間に ^{99m}Tc-DTPA 0.5mCi飲用後背臥位にて経時的に観察を行った。open tip 法は、食道内圧とくにＬＥＳ の圧および逆流誘発試験を実施した。

結果：正常者のＲＩ食道通過時間は、３～５秒で残存率は10％以下であったが、静脈瘤治療群では、通過時間は４～7.5秒と遅延しまた残存率は、12～25％と高率であった。これら症例の open tip の成績はＬＥＳ部での圧の低下、下部食道の嚥下波の平坦化が認められ、また、逆流誘発試験で陽性を示した。

414 標識薬剤による胃腸管内動態の解析

野口雅裕，金子稜威雄，木暮　喬（東邦大　放）
杉戸慶子，緒方宏泰（明薬大　薬剤学）
高野政明，丸山雄三（東邦大　中放核）
佐々木康人（群大　核）

薬剤の胃腸管内動態の解析を目的とし、経口投与薬剤の剤形による胃内容排出時間、小腸通過時間、大腸到達時間の差異および経直腸投与坐剤の油脂性基剤の拡がりの範囲を核医学的手法を用い検討した。

I-131で標識した不溶性コーティング錠剤およびTc-99m を内部に封入したビニール製ペレットを健常男子５名に両者を４ヶずつ同時に内服させ10時間まで経時的に撮影した。３種の油脂性基剤 Witepsol H-5, W-35, S-55を Tc-99m で標識し、健常男子５名に直腸内投与し、４時間まで経時的にシンチグラムを撮影しコンピュータ処理も行なった。

同一被験者における錠剤とペレットはほぼ同じ動態を示し、各々の時間には個人差が認められたが回腸末端への到達時間は４～５時間と一定であった。坐剤基剤の拡がりは挿入部の４時間後の残存放射能は約45%を示し、各被験者における垂直方向への移動距離は５～11.5cmで平均約８cmであり、投与直前に排便したものが最も上昇を示し直腸内糞便の有無と基剤の拡がりに関係があることが示唆された。

415 RIによる Ileocolon interposition（胃全摘後再建）の排出能の評価

古西博明，山崎俊江，青木茂，鈴木輝康，山崎武，
（滋賀医大　放）
柴田純祐，（滋賀医大　Ⅰ外）

Ileocolon interposition は胃全摘後の再建法の一つであるが、逆流性食道炎やダンピング症状をきたす事が少ないと報告されている。Ileocolon interposition の代用胃としての機能を評価するために、Tc－99m－DTPA服用法により、胃内容物の排出能（貯留能）についてＢⅠ法、ＢⅡ法、食道空腸吻合法と比較検討した。方法は Tc－99m－DTPA lmciを含むジュースを左側臥位で服用させた後、背臥位にてシンチカメラで撮影し、同時にコンピューターに記録した後、カーブを解析し、その排出能の評価を行なった。その結果半数が①排出が遅延するグループ（$T_{\frac{1}{2}}$が60 分以上）、残り半数が②比較的急速に排出されるグループ（$T_{\frac{1}{2}}$が20分以内）に分かれた。排出遅延グループは一定の速度で排出され、ＢⅡ法の場合と類似し、速いグループは３相に分かれ、初期排出相はＢⅠ法に類似し、貯留能は良かった。Tc－99m－DTPA による胃排出能検査は Ileocolon の代用胃としての機能の意義付けに役だった。

416 Tc－99m 標識赤血球による下部消化管出血源の検索

明石恒浩，相澤信行，原芳邦（茅ケ崎徳洲会病院内）三井民人（同　放）鈴木豊（東海大　放）

下部消化管出血疑診例に対しTc－99m RBC Scan の有用性につき検討した。対象は下部消化管出血疑診例56例。方法はスズピロリン酸静注後に Tc－99m O_4^- 20mCiまたは in-vitro に標識した Tc－99m RBC 20mCiを急速静注しRI angiography を施行した後５，15，30，45，60分後の Static images を撮影し、以後最高24時間まで適時撮影を行った。結果は、56例中31例は発症後24時間以内に行われており24例（77％）に陽性所見があり、発症後24時間以後に施行された25例では15例（60％）に陽性所見があった。陽性描出はRI angiography 中に10例、60分以内の撮影で更に10例、60分以後に更に19例あった。病変は大腸癌、大腸直腸潰瘍、出血性大腸炎等の大腸直腸病変18例、小腸病変５例等であった。合併症副作用は皆無であった。陽性例陰性例ともに以後の診断手順に大きな影響を及ぼした。以上より Tc－99m RBC Scan は簡便且つ非侵襲的で、急性期に行う程陽性率が高く、継時的に追跡することによって検出率が高まった。また、本検査法は下部消化管出血疑診例において第一に行われるべき検査法であると考えられた。

Presented by Medical*Online